

重複障害者の進路と福祉について

— 聾精薄者を中心にして —

小 川 再 治

〔I〕

昭和43年4月、文部省に重複障害児教育のための委員会が発足し、筆者も委員を委嘱された。というのは、現在「盲」「聾」「精神薄弱」「肢体不自由」「身体虚弱」などの単一障害の児童に対する特殊教育はかなり普及進歩したにもかかわらず、これら各領域の中間地帯にある重複障害児の教育に、力の及ばない所があったからである。現在アメリカ、ソ連などの特殊教育の先進国で、重複障害児の教育に力を注ぐようになり、これに刺激された日本でも、遅まきながらこのような日の当たらない谷間にある子ども達の教育が、重視され始めた。そこで文部省は十数名の委員から成る本委員会をつくり、重複障害児教育のための手引書を編集するための協同作業を開始したのである。

この委員会では、多種にわたる重複障害児の内、先ず「盲聾」「盲精薄」「聾精薄」を対象にすることになり、筆者は主に彼らの進路と福祉について調べるよう委託された。筆者の分担領域はほとんど未開拓で資料が無く、研究は遅々として進まなかったが、どうにか多少発表するに足る知見を獲得した。一応ここに報告したいと思う。

〔II〕

現在わが国にこのような重複障害児がどの位いるかについては資料が少ない。これは「盲聾」「盲精薄」「聾精薄」の定義にあいまいな点がある現在では、ある程度やむをえない所である。ここでは一応、「盲聾」「盲精薄」「聾精薄」をそれぞれ「視力と聴力に重大な障害のある者」「視力と知能に重大な障害のある者」「聴力と知能に重大な障害のある者」と定義しておく。しかし視力、聴力、知能などの程度がまちまちで非常に個人差に富んでいる。

現在、この3種の障害者の内、「盲聾」「盲精薄」はほとんど就職の可能性が無く、日本で自立している者は皆無といってよい。盲聾では特に知能の勝れた者が幸運に恵まれた場合以外は、先ず自立の可能性がない。有名なヘレン・ケラーは、この恵まれ

重複障害者の進路と福祉について

た例外者であった。(しかし、このような恵まれた例外者は、ヘレン・ケラーのように一躍、社会の名士になる可能性が多い) 実は我が国でも盲聾者に理想的な教育を試みるための研究が行なわれた。一応の知能水準に達している盲聾児2名を幼児期より山梨盲学校に収容し、梅津八三・三木安正・尾島碩心ら日本の特殊児童心理の最高権威の指導の下、昭和25年以来16年間も教育した。この教育はたびたびマスコミにも報じられたし、事実すばらしい成果をあげた。しかし矢張り、彼らを自立させるには至らなかった。

この2名は昭和18年生れのS. Y. (女)と昭和19年生れのA. T. (男)であるが、昭和41年教育打ち切りとなった。県教委、研究者、教員らで検討したが、施設へ入れるか、家庭に帰すかの2つの内1つをとる外はなかった。しかし家庭は貧困で受入れる態勢が無く、また適当な施設も見当らなかった。2名は一応身の自立は可能で、点字と指文字を習得していたが、付きそいなしでは生活困難であった。

そこで某盲児施設に、応急にこの2名を収容してもらって現在にいたっている。彼らは現在施設内で他の盲児とともに生活し、点字、指文字を用い、生活訓練、学習訓練、作業訓練をうけているが、あまり内容あるものでない。作業としては点字本の書写、点訳本の製本、編物、裁縫などの簡単な仕事をやっているに過ぎない。以前、彼らに研究者らが大変な苦勞をしてスピーチの能力を与えたのであるが、現在使う機会も殆どないので退化してしまったという。また、数学、国語などかなり高度な勉学をしたのであるが、これを使う機会も与えられていない。2名に教育して身につけさせたものは、ほとんど宝のもちぐされになってしまった。結局わが国には、まだ彼らを自立させる基盤がなかったということになるだろうが、痛々しいことである。彼らがアメリカに生れたとしても、果してヘレン・ケラーの水準に達したかは分らないが、やはり国に彼らの能力を発揮させてやる条件が整わなければ、理想的な教育を与えても最後はS. Y., A. T.の現状のようになってしまう。

現在日本の盲聾者として、最も良い教育をうけた2名でさえ遂に自立に至らなかったのだから、他の人々は推して知るべしである。将来は彼らの生活の保護という面でも、もっと経済的な裏付けをすべきだと思う。

盲精薄者もまた軽度の者以外は自立困難である。現在広島県では、盲学校支援の下に広島県盲人協会が、県の郊外に約500m²の用地を求め、盲精薄授産施設の建設をしている。将来このような施設が、より多く各地区に設立されれば、彼らのために貢献する所大であろう。

現在盲精薄者の大半は家にいる筈だし、その数は2～3万と推定されているが、残

念ながら所在もほとんど分っていない。今後彼らにも可能な職業を発見、開拓すべきであろう。現在彼らに就職可能な職種は、理療(あんま、マッサージ、はり、きゅう)だけで、しかも障害が軽い者に限られている。このような者の内、国家試験に合格する者もあるが、たとえ合格しても、就職・自立までに至ることは至難であるという。

以上のべたように、盲聾・盲精薄とも、就職、自立がほとんど困難である。しかし聾精薄だけは、就職が比較的容易で、経済的にどうにか自立している者もある。聾精薄については、特に実態調査を行なったので、次にやや詳しく紹介する。

〔III〕

聾精薄児の内、精薄教育の学校に進む者は稀で、就学免除になるか聾学校の特殊学級に入るかする者が多い。彼らを教育する場合、目標をどのように定めるかについては、意見の分れる所である。彼らを特別学級などで指導しても、大部分の者は小学校5年程度の学力にとどまる。この故をもって、聾精薄教育の到達目標もこの程度の学力で充分とし、あとは丈夫な身体、労働意欲、かげひなたなく働く態度、人に可愛がられる人柄を持たせればよいという考え方もある^{注2)}。しかし我々は、まだ彼らの能力の限界を正確に測定する方法を発見していない。従って上のような考え方をとると、彼らの能力を充分発揮させずに終る恐れがでてくる。また、この考え方は資本家、傭い主には都合が良いが、聾精薄者の人間性を軽くみている。勿論彼らを考える習慣や批判力をそなえた高い水準の職業人にすることは、非常に困難であろう。この点で普通教育、あるいは大学教育などの目標とは異なった、聾精薄教育の目標が必要になる。

筆者の考えでは、聾精薄者が各自の個性を生かし、立派な聾精薄者になるということを目指すべきだと思う。勿論この「立派な」内容が大問題で、内容如何によっては、それこそ資本家側だけに都合のよい人間像になってしまう。また、平原春好^{注3)}は、特殊教育関係者がしばしば、生徒に一般人とは違う特殊な人間像を強制するという批判をしている。たしかにこの批判は当たっている面があるが、筆者の考えは平原氏が批判するようなものではない。彼らなりの潜在能力を十二分に発揮した人間像を考えているのである。

だが、筆者には平原氏の批判に全面的に賛同しかねる点がある。というのは彼らが一般人と同じになることは出来ないという事実があるからである。彼らの潜在能力を我々はとらえつくせないが、反面彼らがこの能力を全部出し切ったとしても、正常なレベルにはとどかないという壁もあるのである。従って結果においては、平原氏の

重複障害者の進路と福祉について

批判した「特殊な人間像」をも考慮に入れていなければならないのである。

(IV)

次に筆者が43年夏から約1年にわたり、折に触れて調査して来た聾精薄者の実状についてのべよう。筆者が調べたのは、聾学校卒業者、あるいは未就学の者の青年期以後の就職状況、生活調査などである。

最初に聾学校を卒業して就職している者を対象に調査した。東京都と宇都宮市の聾学校を卒業し、都内と栃木県内に就職した者10名を選び、備い主に質問し、この10名の状況につき、色々答えてもらった。^{注4)}就職先はいずれも中・小企業で、中企業は割合小規模のものが多い。10名の職務内容は次の如くであった。

- ① トランジスタ・ラジオの組立て。最も単純な部分を受持つ。外わくに内容の器械を落とし込む。接着は別の者がやる。
- ② コンパス組立ての部分動作。2本の部分品を接触させる。接着は別の者がやる。
- ③ 写真印刷された紙を揃える。
- ④ 光学器械の部分品（輪状）を一定数だけ棒に通し、他人に渡す。
- ⑤ テレビ製造の最も単純な部分動作。外板の孔にネジを落とし込む。締め上げは他の者がやる。
- ⑥ 提灯製造の部分作業。
- ⑦ おり箱製造の部分作業。
- ⑧ コイル巻き。鋼線に手をあてがっていれば機械が自動的に巻く。
- ⑨ せんべい焼きの補助。半流動体の材料を鉄製の型に流し込む。別の者が焼き上げる。
- ⑩ 工場内の電話器の近くに腰かけ、一日中あみものなどの好きなことをしている。目的は電話料をごまかす人間の監視。（電話料をごまかしても監視者には分らないが、気がひけるのでキチンと払う）

以上は、すべて極度に単純で容易な作業で、特に⑩は何もしなくてもよい。これらの職種の内には、将来オートメ化が徹底すれば、消滅する可能性のある者が多い。特に⑥と⑦以外は、このような可能性が強い。⑩もコインを投入しなければ電流の通じない電話器を設備すれば、必要がなくなる。しかしこれらの職業は、オートメ化されない限りは、彼らでも普通人とそれ程変らない能率をあげ得る。その点では彼らに向いた職業といえる。ただし、⑨のように彼らに食品を扱かわせる場合、彼らの衛生観念の乏しさ、注意の分配の困難性などによって、不潔になりやすい。彼らが働らいて

いる現場をみれば、製品を食べる気がしなくなるという。しかも上役・同僚も、彼らの非衛生的な働らきぶりを黙認している場合が多く、むしい備い主側の倫理観が問題にされる必要がある。

聾精薄者を教育している人々は、将来一層オートメ化が進むことを考慮に入れて、彼らの進出先の発見・開拓にとり組まなければならない。この場合、例えば紡績工業の盛んな地域では、紡績関係の仕事の中に彼らの職種を見出すというように、その地域による特性を考慮すべきである。このような努力をしなければ、オートメ化が完備した後は、彼らの進出分野は限定され、例えば工場のくず拾い、敷地の雑草抜きのような、最下級の単純な雑役をあますのみになるだろう。

勿論彼らの可能性を十二分に引き出すことによって、先の10人のような低い水準の職務ではなく、何かもっと内容の高い、彼らが人間らしく働らせる職務につけるようにしてやるのが理想である。しかし現実にはこれは仲々困難で、先の10人のような非熟練職業であっても、一応これを確保していれば、現状では先ず成功者とみななければならない。将来は上述の理想をも考慮に入れて、この問題を考えていかなければならないと思う。

なお筆者は極く最近(44年8月)、厚生省聴力言語障害センターに依頼し、聾精薄者を対象にした質問紙を、備い主・福祉事務所職員などに配布して貰い、配下の聾精薄者について記入して貰った。聾精薄者77名の資料を得たが、先に紹介した10名対象の筆者個人の調査に比べ、極めて簡単な調査なので、問題の見当づけ程度の役にしか立たない。その結果をみると、就職した者の職種は簡易作業、製函、塗装などで、筆者の前の個人調査の場合と似た、単純作業ばかりである。彼らの就職先は、ほとんどこの水準の所であるらしい。

次に筆者の個人調査の結果について、改めて詳しく述べたいと思う。10名の備い主のほとんど全てが、彼らは時として不適応行動を示すといっている。しかしこの問題について、彼らの「不適応」だけを責めるのは片手落ちである。備い主の側にも原因があるかもしれないので、この点もチェックする必要がある。だが今回のように備い主に質問する方法では、備い主側の問題点は表面化していないので、掴まえにくい。聾精薄者側のいい分も聞くべきであるが、表現力の乏しい彼らに質問・筆談などの方法で調査することがまことにむづかしく、今回は断念する外はなかった。

しかし全ての備い主は、聾精薄者が時には不適応の徴項を示すが、一応何とか職場に順応して、職を確保していると答えている。この点には一応の評価を与えてよいであろう。

重複障害者の進路と福祉について

次に備い主に、彼らの職場における人間関係について問うた所、皆仲間に無関心で、相互に孤立しているとの答を得た。また、職場に満足感も不満感も示さず、毎日訓練された通りに働いているということであった。恐らく企業内の最下層の、一歯車としての機能を果しているのであろう。聾精薄者が歯車的な存在にとどまるにせよ、職を確保しているのは嬉ばしいし、備い主はそれで一応充分だと考えているが、教育者はこの水準の目標に甘んじるべきではないと思う。この点については先にのべたが、筆者とは異なり、この水準の目標で充分だという考えの人も沢山ある。恐らく文部省の意見も、この水準でよいとする考えに近いだろう。(昭和30年頃の文部省の書類に、この種の低い目標で充分だと記したものが散見される)

次に当人の作業能率を問うた所、一般工具(正常者)の $\frac{1}{2}$ という回答が多かった。しかし給与水準は能率に比して特に低くなく、大体月収平均20,000円に近かった。初任給で24,000円という者もあった。地方ではもう少し低いらしいが、それでも平均15,000円は貰っているとのことである。備い主達が僅かであっても慈善事業的な考え方をもち、能力をやや上回る給与を出すことも時にはある様だ。(あるいは筆者の質問に対し、実際の金額よりも高い価の答えをした人がいるかもしれない)しかし、それでも自立して家計を営むには不十分である。だがこれは後にものべるが、弱肉強食の経済界で苦闘している備い主に働きかけるよりも、国なり地方自治体なりに、もっと金銭的援助をするよう求める方が先決だろう。

アメリカでも障害者の給与はあまり高くない。重複障害者についての資料は見当たらないが、聾啞者の場合は平均週給60ドルである。1ドル360円の相場によれば、相当の額のように思えるが、実際にアメリカでは1ドルは100円位の価値である所から考えると、日本の月収2万台という水準と匹敵するだろう。筆者が滞米中オハイオ大学から受けていたささやかな給与でさえ、これを遙かに上回る。週給60ドルでは夫婦とも稼ぎをしなければ自立できない。アメリカの障害者の給与が案外低い理由の一つは、かの国の徹底した能力主義にあるのではないかと思う。ただ、かの国にはかなりの数の慈善家がいるので、彼らに救済された幸運な障害者は、経済的に豊かな生活ができるらしい。

次に彼らの勤務ぶりを問うた所、仕事を最少限に果しているが、積極性に乏しいと評される者が多かった。合理的消極的適応方法というか、あるいは合理的退却と評するか、とにかく要求水準をある程度下げ、そこから得られるささやかな満足に甘んじるという型が多かった。これは現在一般の青年にも多い、マイホーム主義と一脈通じるものがある。このような生き方をすると、フラストレーションは少なくなるが、能

力を充分発揮せずに終る可能性が大になる。聾精薄者が人間として、力一杯生きていくという前向きの姿勢が、あまりみられないのは残念である。勿論重大な障害のあるこの人達が、ある程度消極的になるのはやむをえない所でもあるが。

ところがこれに関係していえるのは、先にも一寸触れたが、傭い主達も聾精薄者が、より積極的な人間としての自覚を持つことなどは、あまり望んでいないことである。というのは、傭い主側に、聾精薄者になまじすぐれた人間的特性を持たれては、却って使いにくくなるという考えがあるからである。今回の調査対象の傭い主は彼らに比較的理解があり、利潤追求一点張りとはいえない人達であるが、この人達でさえ、せいぜいこの程度の認識にとどまるらしい。

いわば今回の対象の傭い主達は、障害者に極めて好意的で良心的なグループなのである。何故なら障害者の人間的向上を望まない点は残念だが、場合によっては自分の利潤を僅かではあろうが下げても彼らに職を与え、キチンと給料を払っているのだから。社会にはもっと非良心的な求人が多いという。この種の悪徳傭い主達は、障害者と共に聾精薄に対する予備知識は無く、しかも利己的である。彼らは最近普通中学卒業者が求人難なので、より安い経費で、使い易い従業員を求めたいニーズを持っている。そこで聾精薄者は不満を訴えにくく、自己の権利を主張しにくいことに着眼し、給料をなるべく値切った上で、最下層の単純作業をやらせる努力を確保するため、聾精薄者への求人をやる。この種の不純な人間もかなりいるらしい。このよしたる求人に応じた聾精薄者は災難で、うっかり就職すれば「まひるの暗黒」であろうし、有名な「女工哀史」のような悲劇を味わうことになる。聾精薄者はこのような災難を未然に避ける力が微弱であるから、関係者の方で注意して、災いを予防してやらなければならない。この意味で、職場に送り込んでからのアフターケアも必要である。

次いで傭い主に聾精薄者の性格特性を尋ねた所、概して従順・正直・まじめであるが、時々自分本位性を示すという回答がほとんど全てであった。彼らが示す自分本位的行動の例をあげると、気が向かないと仕事をしないので、その時は仲間が彼の分担を代行するというような種類のものである。この自分本位性は、時には極めて非常識なものとなり、例えば皆が忙がしく残業している時に、一人だけ規定時間に帰宅するような行動を示しやすい。

彼らにこの種の行動が多いらしいが、筆者はこのよしたる行動を示す聾精薄者に「悪の意識」はないと思う。彼らにこの種の行動が多い原因は、その時の場面に依じて変る、とるべき行動の型と、やってはならないタブーとをすばやく感知する能力に欠け、しかも他人への配慮が不十分という所にあると思う。しかし彼らに、場面に応じ

重複障害者の進路と福祉について

て千変万化する行動の型とタブーを認知する能力（いわゆる「常識」に近い能力）を与えるのは容易でない。彼らは耳に欠陥があるので環境から隔絶しやすいし、しかも知能も劣る。何とか他人の立場も考える能力を少しずつもたせ、この種の欠陥を克服させる方法を見出したいものである。しかしこれは容易ではないだろう。というのは、この種の欠陥は、彼らが一番克服しがたい深層に根を張っていると思われるからである。

〔V〕

次に就職できず、家庭あるいは授産所などの福祉施設にいる聾精薄者の実情をみたい。この問題については、先述の筆者が最近聴力言語障害センターに依頼した、簡易な調査があるに過ぎない。先にものべたように、この調査は77名の聾精薄者を対象にしているが、その内家庭にいる者は僅か2名である。恐らく日本の聾精薄者の大半は家庭にあると思われるし、その実数はハッキリしないにしても一応数万人と推定される。筆者はその内僅か2名しか掴まえられなかった。これでは推計学的なサンプルにはならない。

しかしこの2名は、実質的には日本全国の聾精薄者の状態を象徴していると思える。2名とも家庭では家事・家業を手伝うわけではなく、内職もしておらず要するにぶらぶらしている。数万人の家庭にいる人達も、この2名と同様特に生活目標もなく、家族に全く依存してぶらぶらしているらしい。恐らく大部分の人は不就学であろう。彼らは狭い単純な生活空間の中で、人間らしい知識も徳性も持たず、ただ食物を与えられて生きていただけとってよい。いわば筆者の家にいる飼猫の生活とほとんど変る所がない。痛々しいことである。聾精薄者はとにかく就学しなければ、「人間」になれないのであろう。この痛々しい生活様式が、家庭にこもる彼らの姿であって、日本の聾精薄者の大半が、このような状態にあると想像される現状なのである。

次に、福祉施設にいる者の現状についてのべよう。東京と近辺にある福祉施設の内、多くの聾精薄者を世話しているのは、某特志家が設立した私立A授産所だけらしい。このA授産所を調べた所、重複障害者60名を収容しているが、内40名は聾精薄者であった。全員就学免除である。全寮制で木工訓練をしている。20才で修了し就職するのがたてまえであるが、どうにか就職できる技能に達する者が $\frac{2}{3}$ で、残りの人はものにならない。この、ものにならない人達のほとんどは重症者で、家に引取らずか、コロニーのような所に移すかする。就職先は手工業を主とする中小企業が多い。

現在筆者が知り得た聾精薄者の福祉施設は、このA授産所だけであるが、外の大抵

の授産所には、もし居るとしても1施設数名以内らしい。恐らくA授産所のように、集中的に聾精薄者を指導せず、雑多な障害児の中の一部として扱われているであろう。従ってA授産所よりも訓練成績、生活環境とも、多少劣ると想像される。

〔VI〕

以上のべてきたように、盲聾者・盲精薄者とも就職できず、他人に依存せざるを得ない状態である。特に盲聾者の中には色々の才能を持った人がいるであろうが、現在では空しく埋もれる外はない。また、聾精薄者は一応就職できるが、必ずしも能力を充分伸ばして人間らしい生活を送っていない。

現在の彼らに一番必要なものは、先にものべたが国や地方自治体の援助の強化であろう。国もこの点に遅まきながら気付き、冒頭にのべたように文部省に委員会を作ったが、まだ経済的援助が乏し過ぎる。従って、先にも触れたが、元来は金をもうけることを目的にしている中・小企業主の内の一部の善意の人々が、もうけの幅を少々薄くして、国の代りに彼らをおる程度養っていることさえある。この辺に問題があると思う。

彼らに接する人々が一番注意する点は、彼らが「障害者」であることへの認識を忘れないことであろう。彼らの人格の尊厳を尊重しながらも、同時に彼らが我々よりも障害の多い人であることを、いつも考慮していなければならない。先程、多少の犠牲を負担して彼らを保護している備い主もあるとのべたが、この精神に則った保護が、どうしても必要だと思う。例えば一般工員が使う機械よりも多少燃料消費が大であるが、彼らに使いやすく安全な機械を持たせるようなことも、考えるべきである。このようなことを、備い主だけに期待しても、これは大した効果はない。やはり先にものべたように、もっと公共的な、経済的裏付けのある援助が必要だと思う。

〔注〕

- (1) 従来から文部省の根本的教育方針には不満な筆者は、委員を断りたい気もあった。しかし不幸な児童に何らかの寄与ができればと考え、受諾した。
- (2) これは中教審の「期待される人間像」とかなり似た目標設定である。
- (3) 平原春好：日本における障害児教育の行政、“教育学研究”、36巻1号、p.9-18、昭44。
- (4) 東京と宇都宮を選んだのは、学問的な根拠からではなく、調査に便宜を得やすい事情があったからに過ぎない。

〔附記〕 本年度は全く投稿するつもりが無かった。所が9月終頃委員の方の寄稿依頼があり、超弱気な私は引受けてしまった。その後は期日との競争で苦心の末、この小論をまとめた次第である。各方面の方々の御叱正を期待している。

(おがわ さいじ 本学教授・心理学)